

県学給だより

令和3年度における 学校給食用物資の動向予測について

令和2年度の経済は、新型コロナウイルス感染症の影響により、感染拡大防止策として人の移動・接触の制限が求められたことから、生活・社会活動に大きな影響を与えました。

昨年2月過ぎから、政府や一部地方自治体により流行第一波の予兆を踏まえて、学校、外出、会食、イベントなど諸活動の自粛を要請され、本県においても対象となっている小学校・中学校・高等学校・特別支援学校で休校となりました。また、4月の緊急事態宣言により更に制限を受けることとなりましたが、国民への食料の供給は、国内生産、輸入、流通、小売等の各関係者の奮闘により、途切れることなく続けられました。

一時は、食料調達の不安感や家庭需要の拡大によりケーキミックス粉、バター、パスタなどの食品が一部地域の店頭で品切れ状態になりましたが、備蓄が十分にあるとの政府の呼びかけや、生産・流通等関係者の対応により徐々に解消されたのも記憶に新しいところです。

学校給食向けの牛乳(学乳)のキャンセル対応としては、学乳向けの生乳が廃棄されることがないように、加工用(長期間保存可能な脱脂粉乳等向け)に仕向け先を変更する調整が、業界を挙げて行われました。飲用に比べて加工用は乳価が安くなるどころ、価格差を埋める支援等が講じられました。

和牛肉についても、在庫の積上りを受けて枝肉価格が低迷し、肉用牛の肥育経営が厳しくなっており、この状況に対応するため、国から、一定要件のもと(経営改善に向けた取組の実践や、価格の下落等)、支援策が設けられ、本県においても、学校給食への「県産和牛」の無償提供が実施され、本会も納入者として参加させていただきました。

今後のコロナ禍の行方及び変異種への対応、オリンピックの開催か否かなど、物価を左右する要素がたくさんあります。

このような状況の下、令和3年度の価格動向を予測するのは極めて困難なことではありますが、本県学校給食会が収集した範囲内で情報提供いたします。

1 基本物資

(パン・めん・精米・米飯・米加工品等)

(1) 学校給食用小麦粉

輸入小麦の政府売渡価格は、価格変動制(年2回、4月期・10月期)を導入している。

売渡価格は、改定ルールに基づき、輸入小麦の直近6か月間の平均買付価格を基に算定している。(穀物の国際相場、海上運賃、為替等の動向を反映した買付価格)

小麦相場は、昨年10月期の政府売渡価格は値下がりしたものの、ロシアや米国の雨不足による干ばつ懸念や、輸送コストの上昇等を受けて、昨年12月期算定期間(令和2年9月第2、3週~令和

2年12月)の平均価格は前期に比べ上昇した。

令和3年4月期の政府売渡価格は、3月上旬に決定される。今後の為替動向、小麦の作柄、産地の在庫状況や天候要因などによって変化するとみられるが、現状では上昇傾向が続くと思われる。

国内産麦(中力粉)価格は、昨年9月に行われた令和3年産民間流通麦入札において、主要産地である北海道の作柄は例年並みであり、堅調な国内需要や輸入麦の価格改定と連動した事後調整により決定されるが、大きな変動はなく前年度並みが見込まれる。

これに基づき、3月に県内の製粉工場3社による指名競争入札を実施し、学校給食用小麦粉価格

(強力粉・中力粉)を決定することとなる。

ア. 学校給食用米粉パン

パンは県産米粉20%を配合した「米粉パン(岡山っ子こめこパン)」を供給している。

原材料であるショートニング、脱脂粉乳は値上げ、強力粉、米粉、砂糖は据え置き相当の見込みである。

原材料、加工賃を合わせたパン価格は、令和2年度相当と予測される。

イ. 学校給食用米粉めん、うどん

ソフトスパゲティ式めん、中華めんは県産米粉を20%配合した「米粉めん」を供給している。

原材料(強力粉、米粉)、加工賃(グルテンを含む)を合わせた米粉めん価格は、令和2年度相当と予測される。

うどん価格は、令和2年度相当と予測される。

(2) 学校給食用米穀等

岡山県の令和2年産水稻の作柄(農政局12月9日公表)は、トビイロウンカによる被害発生に加え、夏場が高温気味に経過したことで収穫量は減少し、作況指数は95(南部93、中北部97)の「やや不良」となった。

ア. 学校給食用精米

令和2年産新米価格(令和2年11・12月～)は、例年であれば作況指数の状況から値上げが予想されるところだが、新型コロナウイルスの影響による中食・外食産業の需要量低下に伴い、市場在庫が過剰になったことから、全品種で多少の値下げとなった。

新年度価格(令和3年4月～)は、2月末頃に米穀取扱業者、精米工場と価格交渉して決定するが、据え置きの見込みである。

イ. 委託炊飯(米飯)

令和2年産新米価格が値下げとなったため、年度当初と比べて新米炊飯価格は、値下げが予測される。

加工賃と合わせた炊飯価格は、多少の値下げが予測される。

ウ. 米加工食品

アルファ化米は全国的な新米価格の値下がりにより、多少の値下げが予想される。一方でアルファ化赤飯は大規模なもち米産地の不作の影響を受け、原料高騰により値上げの見込みである。

エ. 強化精麦・強化米

強化精麦(強化白麦、切断無圧ペン精麦)価格は、据え置きの見込みである。

強化米価格は、据え置きの見込みである。

2 学校給食用牛乳

乳価については、令和2年度並みの推移と見込まれるが、ドライバー不足等に起因する物流コストの増加により、供給価格の値上がりが予想される。岡山県の令和3年度の牛乳価格は、1月に各供給乳業者から見積を徴収し、3月に補助額が決定され、県内平均供給価格が算定される。

3 常温物資

(1) 食用油

原料大豆は、主要産地の天候不順により生産量は減少し、原料価格が上昇している。さらに中国やインドの需要が増え引き合いが強くなっていることに加え、新型コロナウイルスの影響も受け、為替も不安定であるため値上げが予想される。

こめ油は、年々米の消費量が減少していることに伴い国産原料の米ぬかの確保が厳しくなっている。外国産原料を輸入し始めたが、それでも確保が難しい状況で、値上がりが予想される。

(2) 砂糖

原料の粗糖を生産している主要国のタイでは2年連続大幅な減産となったが、ブラジル・インドの生産量は大幅に増加したことにより、全体量は増加傾向になった。しかし、国際価格は為替の上昇、タイの減産を背景に上昇している。この上昇分は精糖メーカーが負担している状態で、今後値上げとなる可能性が高い。

(3) 乳製品(バター、チーズ)

新型コロナウイルスの影響により、牛乳や乳製品の需要が混乱する一方で、生乳生産量は増産基調で推移している。しかし、外出自粛の影響により、家庭用のバター、チーズの需要が高まった一方で、業務用は外食やインバウンド需要の停滞で、消費が激減し、在庫が積み増す事態となっている。価格については横這いまたは値上げが予想される。

(4) 缶詰

ア. みかん缶(国産)

令和2年度の温州みかんの生産量は前年比の103%と予想される。令和2年度産のみかんは大玉傾向で8割はLサイズになる予定。加工用原料の入荷については年々減少しているが、昨年並みの数量は確保できる見込み。価格については生産者救済の為、全国的に加工用原料価格が上昇することが懸念材料となるが、高値安定が予想される。

イ. たけのこ(岡山県真備産・国産)

真備産たけのこは、令和3年度は裏年にあたる。西日本豪雨後まだ収穫する人が完全には戻っておらず、収穫量は減少している。昨年は根の張る秋口に雨が少なかったため、今後収穫時期に雨が降らなければ、たけのこの生育も悪くなり収穫量の減少につながると予想されるため価格は値上げ、または横這いで推移すると思われる。

国産たけのこ（九州産）については、令和3年は表年だが、真備産と同様に秋口に雨が少なかったこともあり、現状は生育が悪い。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の影響により、昨年在庫過多により製品価格は横這いで推移すると予想される。

ウ. パイン缶（タイ産）

タイの令和2年度産のパインは天候不順の影響により原料が不足したことに加え、コロナ禍による外人ワーカーの不足、船積遅延によりコンテナ不足を招く結果となり、19年対比で約30%の減産となった。このような状況が続くことになれば、日本への供給も安定するかどうか分からない状況。販売価格は値上がりが見込まれる。

エ. うずら（国産）

生産量は順調ではあるが、新型コロナウイルスの影響により、需要量が減少し、在庫が過多になっている。さらに入荷卵価コストに大きく影響する飼料価格が大幅に値上げされたことに加えて、資材価格の高騰・人件費の値上げの要請が多く、製品価格については値上がりが見込まれる。

オ. ツナ缶

令和2年1月～12月の日本近海のマグロ水揚げ実績は、16,297トン（令和元年1月～12月21,360トン）と昨年の76%漁獲量は減少した。しかしながら、大型サイズが主体であった為に、価格は昨年より下がったものの、加工用の中小型魚の割合が低く、原料価格は高値で推移している。価格について、製造工場の人手不足もあり、1次処理を行った原料を輸入する割合が年々増えていて、その分原料価格が上がるため製品価格も安定しない状況。価格は横ばい、もしくは値上げが見込まれる。

(5) 乾物

ア. 岡山県産乾椎茸

県北は昨年度末から雪が降り山間部では気温が低く積雪になった。一昨年、昨年は暖冬の影響により原木しいたけの発生条件である「低温刺激」が少なくなり生産量は減少したが、令和2年度産は好転すると予想される。さらに新規の生産者も加

わり、集荷量は増加する見込み。価格については安定すると予想される。

イ. 生わかめ

新物わかめの生産は、三陸、岩手・宮城両県とも12月以降一気に海水温が下がり、順調な生育状況にある。鳴門産についても同様に順調な生育が続いているため、このまま気象が安定すれば価格は横ばいと予想される。

ウ. 海苔

国産海苔の生産は令和元年度全国生産量63億枚の大減産となったが、令和2年度は69億8000万枚と前年比9.5%増とやや増加した。現在国内の年間総需要量は約80億枚と云われており、不足分は韓国、中国からの海苔が約15億～20億枚輸入されて国内需要に対応している。コロナ禍の影響により、特に中上級～上級品の消化が進まず滞留在庫となり、巣ごもり需要の高まりから中級品以下は消化が進み、一部不足気味の状況で新海苔の生産を迎えた。新海苔は1月現在で、全国生産数は約23億枚と前年同期生産数18億枚を上回っている。しかし、降雨不足による栄養塩不足から色落ち現象が始まっている地区があり、今後適度な降雨がなければ、一気に色落ちが広がる懸念され、生産終了が早まる可能性がある。今後安定した気象状況が続ぎ、全国的に増産となれば、価格は値下げ、又は横ばいが予想される。

エ. 煮干

令和2年度の瀬戸内海地区における生産は、香川県伊吹島・観音寺地区では中荒羽～大羽サイズは良質の物が前年並みに獲れたが、中小羽～中羽サイズは油物で魚質が悪く、不漁のまま10月初旬で漁を終了した。広島・愛媛・山口での漁は継続されたが、魚質は良ならず、11月初旬頃から12月末までに中小羽～中羽サイズでやや良質な物が獲れたが漁獲量は少なく、大半は油物で良質品が少ない年となったため、価格は値上がりが見込まれる。

4 畜産物

(1) 学校給食用輸入牛肉（オーストラリア産）

令和2年当初の相場は、豪州の広範囲での本格的な降雨を約3年ぶりに観測したことで、農家は現状の少ない頭数の牛を少しでも高く売ろうと出荷を見合わせたため高騰したが、新型コロナウイルスの感染拡大以降は、中国を始め、豪州国内・アメリカなどの需要が減退し、下げ基調で推移した。肥育頭数は、過去の干ばつの影響から平成30年と令和

2年を対比すると約15%減少しており、供給量は、依然少ない状況が続くと見込まれる。需要量は、今後も新型コロナの影響で完全には戻らない見込みで需給バランスにより、価格は現状のままで推移すると見られる。しかし、今後、中国・アメリカの消費が回復し、輸出が増加した場合は、価格は大幅に上昇する可能性が高く、不透明な状況であり、据え置きもしくは値上がりが予想される。

(2) 国内産牛肉

令和2年の価格は、新型コロナによる巣ごもり需要から、安価な小間切れなどに売りが集中し、裾物を中心に高騰した。和牛は、売れ行きが悪く相場は下がったが、外食での時短営業などで売れなかった。しかし、年末の巣ごもりで良いものを食べようとする動きから、取り寄せグルメが好調で、スライス物の価格が高騰した。全体的には今後、家庭消費の増加は続く見込まれるが、外食需要の落ち込みは大きく、需要回復も期待できないため、価格は弱含みの展開が予想される。

(3) 豚肉

令和2年の価格は、新型コロナの影響から、テレワークの自宅勤務による家庭内需要が大幅に増加する中で、牛肉よりも安価で使い易い豚肉消費は好調で一気に相場が高騰した。特にバラ肉、肩ロース肉は引き合いが強い。今後も新型コロナの収束が見えていない状況で、高値水準は維持されると思われる。また、鳥インフルエンザによる安価な鶏肉が手に入りにくくなる状況となり、豚肉にシフトする可能性が高いことから、価格は下がる見込みは無く、強含みの展開が予想される。

(4) 鶏肉

令和2年の国産鶏は、新型コロナの感染拡大による政府の緊急事態宣言が4月に発令された以降、外出自粛・営業時間短縮により外食需要は減退したが、巣ごもり消費の高まりによる特需が急激に発生し、内食需要が増加、鶏肉相場は令和元年を上回る水準で推移した。令和3年は、昨年11月に「高病原性鳥インフルエンザ」が発生以降、各地で広がりを見せており、今後の生産面に大きく影響することが懸念され、コロナ禍による内食需要が変わらず高く、高値相場が続くと見られ、強含みの展開が予想される。

(5) 鶏卵

令和2年1月～9月のえ付け羽数は、前年同期比約103%で、特に関東近県（福島・新潟県）や中国地方の増加が目立っており、鶏卵の生産量は、大規模な鳥インフルエンザの発生が無ければ昨年

よりも増えることが予測される。需要面では、家計消費は、新型コロナの影響による巣ごもり需要で増加は続くと思われるが、一方の外食産業は、徐々に回復基調ではあるものの、このまま、コロナ禍が続けば当面は厳しい状況が続くと思われる。今後、ワクチン普及による感染収束、五輪開催、経済活動が正常化されれば価格の安定は見込まれるが、先行きは不透明であり、価格は横ばいが予想される。

5 冷凍物資

(1) 水産物

ア. キハダマグロ

日本国内のマグロの主な水揚げ港である、静岡県焼津港の令和2年巻き網漁のキハダマグロ漁獲量は、令和元年の約3万500トンと比べ新型コロナウィルスの影響により操業する巻き網漁船が少なかったため、約2万6,500トンとなり、前年と比べ減少した結果となった。価格については、観光・飲食業界からの需要減が影響し、在庫を極力持たないよう各社値下げしたため、令和元年の平均単価255円/kgと比べ令和2年の平均単価は221円/kgとなった。近年、日本近海での水揚量は減少してきており、遠洋まで漁に行かなければならなくなったことで、人件費、燃料費が増加し、高値で取引される大きな魚体を狙う漁師が増えてきている。そのため、主に加工用に使用される小型サイズの漁獲量が減少傾向にあり、加工用原料の価格は下がる傾向にない。一方、輸入原料については、海上輸送費の上昇により、価格が上昇しており、この状況はしばらく続くと考えられる。令和3年度価格は、今後の新型コロナウィルスの状況及び漁獲量にもよるが、横ばい若しくは強含みで推移していくと予想される。

イ. 紫いか・するめいか

北太平洋で漁獲する紫いか漁は、三陸沿岸で行われる冬漁（1～3月）と三陸から遥か離れた沖で行う夏漁（6～8月）の2回に分かれており、令和2年の冬漁は不漁であったため、ほぼゼロに終わった。（令和元年は34トン）、夏漁は平成30年の4,350トン、令和元年の7,000トンと比べ大幅に増加し令和2年には8,012トンとなり、原料価格は令和元年と比べ下がる結果となった。令和3年度の紫いか価格は、いか全体の漁獲量にも左右されるが、ほぼ横ばいで推移すると予想される。

令和元年のするめいかの漁獲量は、平成30年と比べ21.2%減の3万2,861トンと6年連続減少

し、過去最低を更新し、価格も更に上昇した。令和2年は11月時点で令和元年の漁獲量と比べ1割程度上昇し、回復の兆しが見えてはいるが、今後当面、低調な水揚げで推移すると予想される。そのため、令和3年度も引き続き原料不足が続き、価格も高値で推移すると予想される。

ウ. むきえび

インド産天然エビの水揚げは、近年安定的に行われており、状況は落ち着いていたが、令和2年は、新型コロナウイルスの影響により漁期間中に現地でロックダウンが発令され、今後の原料不足が懸念されている。先行き不透明な状況の中、在庫確保を目的とする購入先各社からの買付けが集中しており、原料価格上昇の要因となっている。それに加えコロナ禍による海上運賃の上昇などもあり、令和3年度の価格については強含みで推移していくと予想される。

エ. いわし

令和2年の北海道の巻網マイワシの漁獲量は10月末までで24万8,300トンと2年連続で20万トンを超えたが、魚体が小さく、用途としては飼料や肥料向けが約9割で加工向けは1割程度となった。一方、境港での令和2年の漁獲量は4万742トンであり、令和元年の2,114トンを大きく上回った。魚体サイズは鮮魚として販売される大きな魚体が多く、開きなどの加工用で使用される1尾あたり100g程度の魚体は少なかった。令和3年度の価格については、今後の漁獲量に左右されるが当面は強含みで推移されると予想される。

オ. さんま

令和元年の漁獲量は、平成30年に比べ66%減の4万517トンとなり、過去最低を記録した。今までは資源への影響を避けるため、8~12月に漁期が限定されていたが、水産庁は平成30年度末から通年操業を許可し、漁獲量増加を図ったが、令和2年の漁獲量は1~10月では前年同期比36%減の1万2,913トン、10月~11月では好転したが前年を上回るには厳しい状況となった。そのため、令和3年度価格については高値で推移し、品薄の状況が当面続くと予想される。

カ. シロサケ(秋サケ)

北海道のシロサケの漁獲量は、令和元年に約4万5,000トンと平成以降最低を記録し、令和2年も令和元年と同様に5万トンには届かず、2年連続で不漁となった。シロサケは冷たい水を好む魚であるが、令和2年は太平洋沖を通過する台風が少なかったことが影響し、海水がかき混ぜられず、

水温が高い状態が続いたことが不漁の要因であると考えられている。令和2年は北海道だけでなく、令和元年豊漁であったロシアや安定的に漁獲されていたアメリカも不漁であったため、令和3年度の価格は国産・輸入品共に、横ばいから強含みの上昇傾向で推移されると予想される。

キ. くじら(イワシ鯨)

日本は国際捕鯨委員会から脱退し、令和元年7月から南氷洋・北西太平洋での調査捕鯨を止め、領海及び排他的経済水域内で商業捕鯨を開始した。商業捕鯨により捕獲される鯨の大部分はニタリ鯨であり、現在給食用として供給しているイワシ鯨の捕獲数量は少数となっている。令和3年の学校給食向けの供給は、以前行っていた調査捕鯨の副産物で得たイワシ鯨の在庫があるため価格もしばらく横ばいで推移されると予想される。しかしながら、その在庫も残り少なくなっており、商業捕鯨によって捕獲された鯨にシフトする時期が近づいてきている。

(2) 農産物

ア. コーンカーネル(北海道産)

令和2年は北海道の美瑛町では7月までの降雨不足により生育が1週間ほど遅れたが、その後の天候に恵まれ、豊作であった前年並みの収穫量となった。その他の地域でも作付面積が多少減ったものの、台風の影響もなく、好天に恵まれたため、豊作となった。令和3年度の価格については、新物の出荷が始まる9月までは横ばいで推移すると予想される。

イ. 里芋(九州産)

里芋の作柄面積は、農家の高齢化やここ数年続く里芋の病気(軟腐病)の発生による農家の栽培意欲の低下により年々減少傾向にある。主要産地である宮崎県の令和2年産は、台風の影響は少なかったものの、長雨の影響を受け、大玉傾向となり、Mサイズに関しては十分な量であったが、SやSSサイズは少なかった。令和2年も昨年と同様病気の発生もしていたが、宮崎県が予防や発生後の対策を事前に報告していたことにより被害が拡大することなく9月初旬までに大半の収穫が完了した。品質面は平年並みで、収穫量は昨年と比べ減少している。その結果、令和3年度の価格については横ばい若しくは若干高値で推移されると予想される。

ウ. ほうれん草(九州産)

令和2年の九州産ほうれん草の作柄は、9月~11月の間は非常に天候に恵まれ、特に問題なく生

育した。しかし、作付面積は前年と比べ減少傾向となっており、昨年の在庫を膨大に抱えてしまっている農家がほうれん草からブロッコリーへ移行していることが影響している。そのため、令和3年度価格については当面横ばいで推移されると予想される。

エ. 冷凍みかん（国産）

令和2年産温州みかんは、果実品質としては梅雨時期の天候による影響で、糖度・酸度ともに低くなることが懸念されていたが、8月の猛暑と降雨が少なかったことにより、高糖となり食味が良い結果となった。価格は早生品種の出荷量が少な

かったこと、食味が良いこと、家庭での需要が旺盛であることから令和元年価格と比べ高値で推移している。冷凍みかん向け原料の出荷量は昨年と比べ主要産地の多くが大玉傾向ではあるが数量は安定しているため、令和3年度価格は前年価格と比べほぼ横ばいで推移されると予想される。

6 保護者負担の学校給食費

令和3年度の学校給食費は、令和2年度当初と比較して、自校炊飯では2.7%、委託炊飯では3.0%程度の増額を見込む必要があると予想される。

表1 学校給食費の平均月額

区分	年度	27年度		28年度		30年度	
		平均月額(円)	対前年上昇率(%)	平均月額(円)	対前年上昇率(%)	平均月額(円)	上昇率(%)
全国平均	小	4,301	0.8	4,323	0.5	4,343	0.5
	中	4,921	0.8	4,929	0.2	4,941	0.2
岡山県平均	小	4,715	△0.2	4,691	△0.5	4,775	1.8
	中	5,295	△0.1	5,285	△0.2	5,371	1.6

表2 令和2年度1食当たりの平均価格

区分	小学校	中学校
主食(米飯・パン・めん)	46円98銭	54円89銭
牛乳	53円45銭	53円45銭
副食	173円14銭	209円30銭
合計	273円57銭	317円64銭

(注)岡山県教委調査の一食あたりの平均単価(平成30年度)をもととした県学校給食会の推計。

表3 学校給食費の内訳別上昇見込率

区分	小学校			中学校		
	令和2年度 構成比(%)	令和3年度見込比率(%)		令和2年度 構成比(%)	令和3年度見込比率(%)	
		自校炊飯	委託炊飯		自校炊飯	委託炊飯
主食(米飯・パン・めん)	17.2%	96.9%	98.3%	17.3%	96.9%	98.3%
牛乳	19.5%	100.0%	100.0%	16.8%	100.0%	100.0%
副食	63.3%	105.0%	105.0%	65.9%	105.0%	105.0%
合計	100.0%	102.6%	102.8%	100.0%	102.7%	103.0%

(注) 1.県学校給食会で独自に推計したものである。
 2.主食の週当たりの実施回数は、米飯3.00回 パン1.31回 めん0.69回 と推定した。
 3.牛乳は若干の値上げが予想されるが現時点では100%とした。
 4.副食は、それぞれ原料等の動向により値上げ幅は異なるが、現時点での単純平均変動を推計したものである。